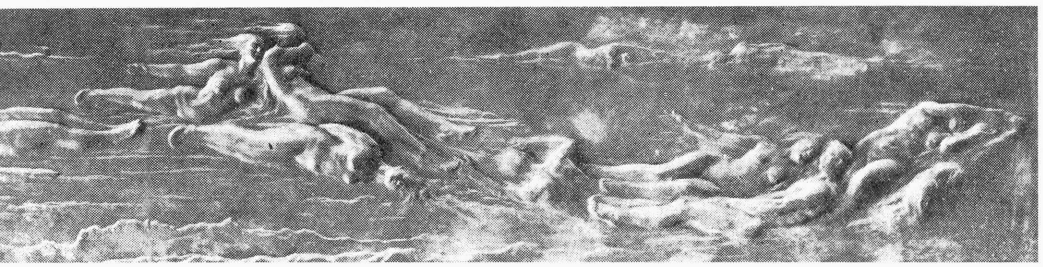
ISSN 0582－4478

京都大学附属図書館報



静脩

1997年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 34, No. 1

ディジタル図書館

附属図書館長　万　波　通　彦

京都大学には60余の図書館（室）がありますが、これは大学の長い歴史を反映している為でしょうか、他大学とは比較にならないほど沢山の数です。その中で、専門文献・専門雑誌と共に一般図書も取り揃え、学部学生が利用しやすいよう整備運営しているのは、附属図書館と総合人間学部図書館です。特に、附属図書館では週日は夜９時まで、土曜、日曜日も開館しています。平成８年の附属図書館の入館者数は、一日平均 2,504人となりました。来館者の大多数が学生として計算すれば（乱暴な計算とお叱りを受けそうですが)、全学の学部・大学院の学生約２万人のうち、約13%が毎日図書館に来ていることになります。沢山の学生諸君が図書館を出入りする様子、夜遅く迄机に向かっている姿、カウンターで職員に相談する様子を見るにつけ、附属図書館の大学教育における重要な役割を改めて認識しました。しかし、それにしても附属図書館の学生用図書購入費が少ないことに驚いています。

その他の図書館（室）は設置部局の専門資料を収集しています。これら図書館（室）は学内の情報ネットワークで有機的に結ばれた京都大学図書館システムを構成し、オンラインで蔵書目録検索(OPAC)が利用できるよう整備されています。未だ数は充分ではありませんが、いくつかのデータベースも利用できます。更に大学共同利用機関である学術情報センターを介して全国の大学図書館と結ばれ、全国的な規模の「学術情報システム」の一翼を担っています。これとは別に、インターネットでは多くの資料が利用できるようになりました。たとえば、「Project Gutenberg」では、聖書を始めシェイクスピア等の書籍約 900冊を電子化し無料公開していますが、2001年までに１万冊を公開する計画だそうです。

このような図書館電子化の動きの中で、京都大学では「電子図書館システム」を設置することとなり、来年１月にはそのための機器

が稼働する予定です。大学の附属図書館の役割として、電子図書館またはディジタル図書館はいかなる機能を持つべきかについては手探りの部分が多くあります。特に最近の電子通信技術の進歩は急速で、電子化される情報の形態、送受信技術等の数年先を予想することも容易ではありません。また、著作権とも関係しますが、今後商業ベースの書物がどのような形で電子出版されるかも予想できません。しかし、教職員・学生が図書館に出向くことなく、教室、研究室、自宅から、できるだけ多くの研究・教育用資料を利用できるようにすることは重要なことです。京都大学内では、ＫＵＩＮＳシステムで大量のデータを送受信できますし、総合情報メディアセンターの教育用端末機器の整備も始まり、情報環境は整いつつあります。

とにかく、附属図書館と京都大学図書館システムは新しい時代を迎えることになりました。外部から購入し学内で利用できるディジタル情報としては、すでに多くのＣＤ－ＲＯＭがあります。さらに、今まで紙の形で出版されていた雑誌をインターネットで直接読むことができる電子ジャーナルや紙媒体を使わずインターネットでのみ利用する電子ジャーナルも出版されています。本学では、数種類のＣＤ－ＲＯＭを媒体とした電子情報が学内ＬＡＮで利用できますし、また、費用は利用者の個人負担ですが大型計算機センターでも数十種類のデータベースを利用できます。いくつかの学内図書室では電子ジャーナルを導入し利用者の便宜を図っていますが、国内の他大学や外国の大学に比べて、京都大学での電子情報の利用、電子ジャーナルの整備は遅れています。図書費の急騰の中で電子ジャーナルを購入するための経費負担は問題ですが、今後はこの種の電子情報を利用しやすくすることが電子図書館の重要な役割です。

インターネットで電子情報を探すためのコンピュータは使い勝手がよくないので、研究分野によってはコンピュータの利用が少ないようですが、電話やファックスのように使いやすくなるのは時間の問題です。電子情報は万能ではありませんが、非常に有力な教育・研究の手段になるに違いありません。より多くの研究分野で電子情報を利用していただけるように、情報機器の整備、利用者支援をすることも附属図書館の任務です。

電子図書館のもう一つの役割として挙げられているのは、学内外に向けての学術情報の発信です。すでに、附属図書館では国宝「今昔物語集」を始め20冊以上の貴重書を映像データとしてホームページに公開しています。更に学内の貴重資料を電子化して公開してゆく予定です。それに加えて、学内で作られる情報を電子化して発信する「京都大学エンサイクロペディア」を計画しています。このためには学術情報の発信源である各部局の協力をお願いしなければなりません。

既に、ディジタル技術を駆使したＣＤ－ＲＯＭは、文字に加えて映像や音を取り入れています。やがて、ＣＤ－ＲＯＭやそれに相当するディジタル出版物は、インターネットを仲介としてより高度の情報源となるでしょう。その時には音楽レコードが音楽ＣＤに役割を譲ったように、紙に書かれた書物はディジタル化された電子出版に置き換わってしまうかもかもしれません。私事ですが、学生時代から歩いた鴨川一帯を詠じた折口信夫の詩「もの忘れ」を改めて読みたくなりました。探していた詩は見つかりましたが、その次に載せてあった詩に心引かれました。私の感傷でしょうか、でも、「書」の挽歌にならないことを願って紹介します。

断　章

思いおこす　さまざまの書（フミ）
あはれ　ほろびにし　さまざまの書
思へども　思い見がたく
さはなりし書のなかにー
たゞ　二つ　三つ　思ほゆる書のこひしきー。

幸薄く　繊弱（アエカ）なりし人の如
人をして　悲しみに堪えざらしむー。
たゞ閑（シズ）かにして　ほのかなる　紙のにほひ。

（折口信夫「近代悲傷集」より）

（まんなみ　みちひこ）

京都大学附属図書館百年の沿革

附属図書館専門員　奥　典子
片山　淳
小山　隆義

京都大学の百周年を記念する上で、図書館の歴史に関する話題という意図から、今回は百年の沿革をまとめてみました。歴代の館長先生の時代にどのような出来事があったかという観点から一文を草してみました。

1．創設から第二次世界大戦の終結まで

京都帝国大学の創設（明治30（1897）年6月）とほぼ時期を同じくして、図書資料を収集・整理・保存しこれを提供する図書館としての業務を開始した附属図書館は、大学における学術資料情報の一拠点として、大学とともに百年の歴史を歩み続けてきた。

初代総長木下廣次の図書館の考え方に基づいて、附属図書館はその姿を現わし、初代館長島文次郎の創設への意欲に支えられて次第に図書館像が形成されてゆく。図書館の建物として最初に完成したのは書庫であり、事務室そして閲覧室が作られ、閲覧業務が開始されたのは、明治32（1899）年12月11日であり、この日を開館記念日としている。設立当初から一ヵ所にまとまっていた訳ではなく、必要に応じて建物が作られていった。大学本体が理工科大学、法科大学、医科大学、文科大学と順次創設され、次第に帝国大学としての形が整えられてゆく中で、図書館の事務組織も整備され、図書館規則の制定、全国的な支援を得ての蔵書形成が進められ、司書官および司書の配置、附属図書館商議会規程の制定等図書館の制度・組織が作られていった。

第2代館長石川一は、明治43（1910）年7月、学生監から司書官に転じた上で館長に補され、実際的な改革に取り組んだ。「増加図書月報」の刊行、カリフォルニア大学との図書の交換、自由接架制の導入、米国議会図書館印刷カードの配布を受けること等が実現した。

明治、大正、昭和の三代に渡り館長を努めることになった第3代館長新村出は、文科大学教授でもあり、この時代に本館の所蔵する特殊文庫のかなりのものが収集されている。また、単に図書館資料を貯蔵するところとしての図書館から大学の教育と繋がる図書館の積極的な活動への脱皮が企図され、指定図書制度が導入され、大正14（1925）年7月には、閲覧室や書庫を備えた初代図書館としての全容が完成した。ただ、昭和11（1936）年には、この閲覧室が全焼するという不幸な事態が発生した。

蔵書が100万冊を数え充実した図書館となってきたが、閲覧室全焼からの再生を図らねばならなかった時代の昭和11（1936）年10月に、第4代館長として文学部教授羽田亨が就任した。第2次世界大戦へと向かう時であり、図書館新営の計画も思うようには進まなかった。しかしながら、この時期には「図書館案内」の発行、「蔵書目録」の刊行事業が着手され、種々の展覧会が開催され、図書館の発展が図られた。

2年余りの在職の後、羽田館長は総長に任ぜられ、後任として昭和14（1939）年1月、経済学部教授本庄栄治郎が第5代館長に就任した。戦争へと進む中での図書館運営であったが、帝国大学相互間での相互貸借や休暇中の図書閲覧の相互利用が進められたり、教官文庫の設置、新入生就学案内つまりオリエンテーションの開始、戦後に重要文化財に指定替えがなされることとなる所蔵貴重資料の国宝指定等があった。

本庄館長の後を受けて第6代館長に文学部教授澤潟久孝が就任したのは、第2次世界大

戦下の昭和17（1942）年７月であり、戦後の昭和22（1947）年５月まで務めることになる。戦時下においては、文献疎開、図書館資料の入手困難についての対策、読書指導機関の設置等が検討されたが、閉塞状況の中での困難には多大なものがあった。戦後、大学の官制が改革され、教育改革の推進力となったアメリカ教育使節団による提言もあり、秩序を失った混乱の中で本館の再建に努力したものの、物資の不足から再建工事も思うようには進まなかった。そのような状況の中で第２代の図書館が竣工するのは、昭和23（1948）年２月のことであった。

２．近代化を目指した戦後の発展

苦難の時代を凌いだ後、昭和22（1947）年６月、第７代館長に文学部教授原随園が就任した。この年京都帝国大学は新制の京都大学と改称され、附属図書館も戦後教育改革のなかで生まれ変わろうとした。市民への読書指導を担当する掛の設置、図書館学講座開講の気運、図書館行政の改善、図書館長の専任制などが議論され、再建への努力が続けられた。一般市民への公開を前提にしたクルーガー図書館の設置、米国教育文庫の設置など、米国民主主義の理念に基づく教化が進められた時期であった。

昭和24（1949）年11月、第８代館長として就任した文学部教授泉井久之助は、翌年アメリカの大学図書館視察に出かけ、新しい技術を導入した図書館を見学している。学生への新刊書のＰＲを目的とした「ライブラリ・ニュース」の発行、館内に陳列室を設置して展示会や講演会を開催、図書館職員養成のための講習会の開催、参考掛の設置、マイクロフィルム・センター館としての文献複写業務開始等を実施し、折りから検討が進められていた「国立大学図書館改善要綱」の作成に参加するなど、大学図書館の運営理念の構築に努力した。

長期に及ぶ文学部からの海外出張のために辞職した泉井館長の後任に、昭和32（1957）年７月、法学部教授田中周友が就任し、第９代館長となった。最初の図書館利用者実態調査の実施、本館内に資料センター（地磁気世界資料室、アメリカ研究センター図書室）を設置し、専門分野の研究者の情報要求に応える体制を整備、事務組織に部課長制を導入、博士論文の保管閲覧体制の整備、増大する文献複写業務の体制整備、著者を囲む座談会の開催、指定図書制度の確立への努力など大学図書館の近代化に向けた取り組みが実施されている。

多忙な時代を指導した田中館長に代わって、昭和38（1963）年７月、経済学部教授堀江保蔵が第10代館長に就任した。出納手続きを踏んで利用されていた図書館資料を利用者スペースに出し、自由接架制の開架図書室、参考図書室が設けられたことは、資料の管理から利用への重点の移行として注目される。資料整理の面では、事務用目録が小型カードから標準カードに変更され、カード作成に複写機を利用することにより、効率化が図られた。また、全学の所蔵データを集めた『学術雑誌総合目録』の刊行、『京都大学七十年史』編集事務室の設置、利用者とのコミュニケーションを図るための館報『静脩』の刊行、膨大な一次資料ＨＲＡＦ（Human Relations Area Files）の提供開始などが実施されているが、大学図書館の近代化を進めるために、学内の教官で組織された「京都大学図書館改善特別委員会」を設置し、図書館組織全体の機能や運営を再検討し、今後の指針をまとめて『京都大学附属図書館報告書』として刊行したことが、近代化への出発点として特に重要である。

３．近代化とライブラリ・システム

改善に尽くした堀江館長の後を受けて、昭和41（1966）年７月、第11代館長に工学部教授宍戸圭一が就任した。宍戸館長は、本館閲覧室に冷房設備を備えることを先ず実現させた。先の報告書を受けて、近代化の推進方策として業務の標準化と全国的な規模での協議会組織の確立による連携強化が図られた。受入事務の簡素化、学内相互利用体制の整備、

目録業務への標準印刷カードの採用、雑誌関係の閲覧窓口の一本化、サトラー赤外線標準スペクトルチャートの購入・利用体制の整備、要覧や概要の発行等が実施された。

昭和43（1968）年から同44（1969）年にかけて大学を揺るがした紛争の中で、図書館もその拠って立つ基盤を問い直され、新たに再構築するための改善への取り組みを指導したのも２期目を迎えた宍戸館長であった。研究所を含めた全学の教官で組織された「図書館問題を検討改善するための商議会専門委員会」を中心に、図書館職員をも巻き込んで「新しい図書館像」の構築のための検討が行なわれた。検討の過程で、業務への電子計算機の導入（機械化）を含む「京都大学ライブラリ・システム」構想が図書館事務部から提出され、合理化の発端となった。また、自然科学系の資料収集面での協力という発想からソ連化学系英訳誌の共同購入やそれに伴うコンテンツ・シート・サービスの実施、附属図書館と部局図書館（室）の機能分担の見直しの結果として、部局における専門図書館としての役割の認識の確立など以後の図書館運営の指針となる内容を含んでいた。実際、この時期（1960年代）に自然科学系の研究所の設置と相俟って研究所に図書資料室が数多く設置されている。

図書館の近代化を推進した宍戸館長に代わって、昭和46（1971）年４月、人文科学研究所教授平岡武夫が第12代館長に就任した。先の専門委員会で検討された内容の中で、図書館業務の機械化は、図書館近代化の柱となるものと考えられた。特に膨大なデータを編集する必要があった冊子体の『学術雑誌総合目録』編纂への適応にはかなりの効果が期待された。情報化社会などといわれる状況にあって、情報処理技術の図書館への導入のためにコンピュータに関する研修が開催され、実験のための職員組織が作られ、図書館のハウスキーピングの面での導入の試みが実施された。資料の収集面での協力という面では、図書館職員の間ではあったが、学内において社史や業界史や地方史などの出版物が数多く寄贈される実態に対して分担収集のための調整が検討された。また、学生の図書館利用の手引きとして、部局図書館室の利用も含めた形での「図書館利用案内」が刊行されたことも記憶しておきたい。また、所蔵資料数も300万冊を超えるに及び、収蔵施設の不足が次第に顕著となり始め、現状を報知するために、各部局の状況が館報に特集されたりもした。平岡館長は、退任前の館報において、旧態依然の図書館の建物について新館建設を切望している趣旨を綴った。

４．学術情報システム構想の中での新図書館

学部等が封鎖される事態の中、京都堀川会館で開催された商議会で、平岡館長の後任に法学部教授林良平が第13代館長に選ばれ、昭和48（1973）年４月に就任した。７月学術審議会から「学術情報の流通体制の改善について」が報告された。図書館のシステム化への提言であった。林館長は、図書館行政を見直し、システム化を実現してゆくために、商議会のもとに、運営改善、機械化等、施設・サービス、建築等の各種専門委員会を組織し具体的な検討を進めた。事務組織の面では、昭和49（1974）年４月に総務課が設置され現在の体制が整備された。林館長は３期９年にわたる在任の間に、悲願であった図書館の新営計画を策定し、現在の建物の建築計画をまとめた。本館にとって重要な先の二つの報告書に盛られた改善内容の具体化にも務め、図書館の利用者（学生、研究者）の情報要求を把握するために実態調査が実施された。特に機械化については、学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」（昭和55（1980）年１月）の京都大学での検討組織として作られた、総長の諮問機関であった学術情報問題調査検討委員会の委員長を務め、10月に「京都大学における学術情報システムの在り方について」（中間報告）をまとめたことによって、ライブラリ・システムの実現への基本構想を策定した。この機械化は、昭和51（1976）年の前金払外国雑誌契約更新処理システムの開始を経て、昭和54（1979）年に行なわれた創立80周年を記念した式典の際

に、大型計算機センターと共同開発した目録システムのデモンストレーションを行ったこと、昭和56（1981）年４月には、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネット・ワーク協議会を組織し、具体的な機械化計画の検討を開始したことなどの延長上にあり、林館長の指導力で強力に進められたものであった。

新館建築に機械化という、図書館にとって重要な積年の課題についての具体的な計画を策定した林館長の後任に、昭和57（1982）年４月、工学部教授高村仁一が就任し、第14代館長となった。高村館長に託された課題は、これら２つの計画の実現であった。特に新図書館への全学的な期待に応えられる図書館活動を実践することが最大の課題であったといえる。図書館活動の展開のために最初に解決する必要があったのは、予算措置であった。全学的な了解を得て、教官・学生当積算校費及び学内教育研究経費から一定の割合で図書館運営費を配分してもらうことができたのは高村館長の尽力によるものであった。昭和59（1984）年３月に新図書館開館記念式典が催されるが、それまでに、学内諸処への図書館機能の分散移転、そして新館竣工後に再移転作業が実施された。また、新図書館で実現すべき機能の整理を行い、文献検索・入手機能を充実させるために、学内所蔵の稀にしか利用されない学術雑誌を集中して保存するためのバックナンバー・センターの設置、高額参考図書の集中化、オンライン検索代行サービスの実施など、読書環境の整備のために、３階までで使用目的に合わせた利用者諸室を拡充・新設するなど、図書館活動の総合的な拡大を図るために、図書館ネットワークのセンターとしての機能を整備、講演会や展示会用、調査研修用の機能整備などが図られた。また、本館創設以来の独自分類から国立国会図書館分類への資料分類法の変更、相互協力掛の設置、ＴＥＬＥＸサービスの開始、閲覧貸出システムの導入、工学部化学系外国雑誌の集中配架なども実施された。一方、機械化については、先の近畿北部地区機械化ネットワーク協議会の概要書及び学内図書館職員の検討をまとめた「京都大学附属図書館機械化概要書」を基に、文部省に地域センターとしての予算要求を行い、これが認められたことにより、新館に併せて一気にシステム化が実現することになった。

開館記念式典を終えた高村館長の後任に、昭和59（1984）年４月、工学部教授西原宏が第15代館長となった。西原館長の時代は、予算化された電子計算機システムの導入・稼動が当面する課題であり、装いも新たな新館の運営とともに力が注がれた。電子計算機システムは、新館開館に合わせて閲覧システムのみ小型のオフィス・コンピュータで全体のシステムに先んじて運用が開始されたが、７月に機種を決定した後、翌（1985）年１月に汎用コンピュータを中心とした機器が搬入された。初めてのシステム化であったため全て新たに開発する必要があり、約10ヵ月かけてメーカーとの打合せが行なわれ、ハウスキーピング関連から稼動が始まり、搬入後１年を経過した昭和61（1986）年１月にようやく、東京大学に設置された全国のセンター館としての文献情報センターと接続した目録システムが稼動した。一方、職員の専門的資質の向上のために館内に調査研究室を設置し、学内の教官に調査研究員を委嘱し、業務の電算化、貴重図書の解題作成等の調査研究が行なわれはじめた。昭和59年12月には、新設されたバックナンバー・センターへの各部局からの資料搬入が実施され、翌年１月から利用が開始されることになった。また、学内における文献複写の効率化を図るための検討も行なわれ、校費支弁による学内ＩＬＬ制度が昭和60（1985）年11月から開始された。一方、国立大学図書館協議会において、大学図書館の公開に対する社会的要請を受けて、調査研究班を設置して共通した指針を作成することになり、本館でもこれを全学的な合意に基づいた本学の指針とするため学内図書館職員の検討を踏まえ、昭和62（1987）年３月には、「学外者利用内規」として裁定され、附属図書館における取扱いの整理が行なわれた。また「相互（現物）貸借の推進方策調査研究班」も設置され、これは本館が中心になり、近畿地区の大学図書館から委員が出て、調査研究を担

当することとなり、検討が行なわれた。この時代は、全国的にも学内的にも相互利用体制の整備が進められた点が特徴である。

5．ネットワークと図書館サービスの展開

図書館業務への電算機システムの導入・稼動を見届けた西原館長の後任として、昭和62（1987）年4月に文学部教授西田龍雄が第16代館長に就任した。集中された工学部化学系外国雑誌を誘因として、昭和62（1987）年4月には、文部省の指定する理工学系外国雑誌センターのサブセンターとなり、初年度として新たに484タイトルの雑誌を選定し受け入れることになった。一方、創立以来収集してきた貴重資料は、新館の貴重書庫に収容されたが、明治32（1899）年作成の「貴重書選定標準」で規定している基準の見直しの必要を痛感した西田館長は、貴重書専門委員会を設置し、1年半に及ぶ検討の結果「京都大学附属図書館貴重書指定基準」をまとめた。この検討の過程で、保存対策も考慮する必要があったため、重要文化財を始めとして、「貴重資料マイクロ化計画」をまとめ、マイクロ化を行うと同時に、複製物を作成し利用に提供することとし、予算を得て実施している。また、鈴鹿家より、「今昔物語集」9巻が寄贈され、これを修復するための予算が配分され、以降の貴重資料の修復の流れを形成した。一方、昭和62（1987）年9月には、国立国会図書館において、それまで唯一の国内の洋図書総合目録であった『新収洋書総合目録』の編纂・発行を中止することが決定された。その理由にあたるものが翌年9月から本学においても運用が開始されるオンライン目録検索の学内へのサービス開始であろう。ＯＰＡＣの学内への本格的な運用は、電子計算機システムが更新された後の平成2（1990）年10月まで待たねばならないが、冊子体目録の作成に使用したコンピュータ・システムが、ネットワークに結ばれて冊子体目録を必要としなくなった点、時の流れを感じさせる。システム化という点では、初めて画像データを取り扱うサービスを計画し、電子ファイリング・システムを使った目次提供サービスが試行されたのが平成3（1991）年5月のことであった。吉田地区と宇治地区とを結ぶ高速ネットワークを活用した新たなサービスとして注目を集めたが、著作権などネットワーク時代において未解決の問題があったため試行されたにとどまった。

電子ファイリング・システムの試行結果をまとめた報告書を出した西田館長の後任に、平成4（1992）年4月、文学部教授朝尾直弘が就任し、第17代館長となった。朝尾館長の第1の仕事は、同年10月に開催される第5回「日米大学図書館会議」のオープン化のために京都で開催することになった「日米ワンデイ・セミナー」の企画・立案・実施であった。日本図書館協会の大学図書館研究集会を兼ねて実施されたが、事務局として参加した本館職員の努力によって成功裡に終了し、この報告書が翌年11月『21世紀に向けての大学図書館』としてまとめられ、同協会から刊行された。この後、附属図書館の将来計画を検討するため、商議会の下に将来構想検討専門委員会が設置されている。また、官公庁の完全週休2日制が実施されたのが平成4年5月であり、これに合わせて土曜日の休日開館が開始されるようになった。この休日開館に合わせて、入力済みの図書資料約40万件の全学蔵書目録がコンピュータにより出力され、利用者に提供された。平成5（1993）年12月には全学的に目録データ未入力部局がなくなり、順調に稼動していたシステムの更新を平成6（1994）年1月に実施し、安定的なシステムの運用が期待された。ネットワークの活用という面からは、平成6年11月には秋季展示会として企画された「吉田松陰とその同志」展が開催され、同時的に「電子図書館研究会」の評価に基づいて開発の進んでいた電子図書館実験システム「Ａｒｉａｄｎｅ」による電子展示での公開実験が行なわれた。さらに、平成7年5月には、医学系から要望の高かったＭＥＤＬＩＮＥ（医学文献情報データベース）のネットワーク利用サービスが開始された。この間、平成9（1997）年に創立百周年を迎えるに当たり、関連資料の収集のために、

本館内に百年史編集史料室が設置され事務を担当することになり、全学にわたる『京都大学百年史』の編集委員会が活動を開始している。また、寄贈を受けた貴重書「鈴鹿本今昔物語集」の修復が完了し、３月には重要文化財に指定された。

平成７(1995)年１月に突如発生した阪神・淡路大震災は、本館においては書架から資料が落下する程度の影響で済んだが、神戸市を中心に多大な被害を及ぼし、神戸大学や神戸商船大学への復旧支援が近畿地区の国立大学を中心に取り組まれ、本学からも多数が支援に参加したことは、不幸な出来事の中での協力活動として記憶に新しい。

電子展示から大震災の復旧支援とこの時代を良く指導した朝尾館長の後任に、平成７（1995）年４月、工学部教授長尾眞が第18代館長に就任した。前年度に重要文化財に指定された「今昔物語集」が、平成８（1996）年６月に国宝に指定され、戦後の文化財保護法（昭和25年）による本館所蔵資料の中で初めて国宝となった。長尾館長は、先の電子図書館研究会を主宰しており、ネットワーク時代の図書館の在り方について指導的役割が期待された。実際、最新の情報処理技術を導入した図書館業務システムの更新計画、電子図書館計画が実現に向けて歩み始めているし、学内の高度情報化の推進に向けた構想の実現も間近い現状である。また、利用者スペースの機能の充実が行なわれ、閲覧席の増設、雑誌閲覧スペース整備、外国新聞の充実等が実施された。

電子図書館システムを含む業務システムの導入・更新計画を立案し、実現に向けて予算を獲得した長尾館長の後任に、平成９年４月１日、大学院工学研究科教授万波通彦が第19代館長に就任した。万波新館長には、ネットワーク上に展開する電子図書館の実現とともに、21世紀に向けた新しい大学図書館の発展における指導的役割が期待されるところである。

（おく のりこ、かたやま じゅん、こやま たかよし）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 図書館の動き ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

新入生オリエンテーションを開催しました

附属図書館では、新年度を迎え新入生のみなさんに図書館の利用方法をお知らせし、大いに利用していただこうと、毎年新入生オリエンテーションを開催しています。

本年度の開催日時は

4月21日（月）～23日（水）
5月14日（水）～16日（金）の各日
12:15～12:45 と 15:00～15:30の時間帯に第１部と第２部を交互に行いました。

（第１部）附属図書館の利用案内
場所：附属図書館３階　ＡＶホール
内容：1.附属図書館内の施設・設備をスライドで案内

2.利用証・貸出・返却・予約・
更新等の利用方法の説明
3.カード目録とＯＰＡＣの説明
参加者数：249名

（第２部）
場所：附属図書館１階　カウンター前
内容：OPAC/TSSの使用法説明と実習
参加者数：395名

今年も第１部・第２部それぞれ６回ずつ開催し、多くの新入生とその他の方にも参加していただきました。第１部のアンケートの回答によりますと（回答数 187)、参加されたのは、新入生が 113名で全体の３分の２程度を占め、続いて修士大学院生（28名)、２回生以上の学部生（15名）となっています。

第１部は、スライドと図書館員の説明で、初めての方に附属図書館の利用方法をおわかりいただくためのものでした。説明終了後希望される方に、図書館内を実際に館員が案内してまわるオプショナルツアーも行い、大変好評をいただきました。

第２部はカウンター前のＯＰＡＣを使って実習形式で行いました。資料の検索には必須のことでもあり、多くの方が参加されて熱心に聞いていただきました。

また、アンケートでは図書館に対する要望もたくさん書いていただきました。それぞれ検討して今後の参考にさせていただきたいと考えています。

（参考調査掛）

文献収集講座を開催しました

引き続き秋には、論文・レポートを作成しようとする方のための、一歩進んだ図書館の使い方講座を下記の通り開催しました。

------附属図書館すてき企画------
論文・レポートのための文献収集講座

もう迷わない！
図書館の活用で効果的な資料集め

●どんな資料があるの？

●どこにあるの？

●どうやって手に入れるの？

開催日

10月１日(水)～３日(金)
12：10～12：50

10月６日(月)～７日(火)
15：00～15：40

場所：附属図書館３階　AVホール
参加者数：354名

この講座は昨年初めて開催し、大変ご好評をいただきましたので、本年も引き続き開催したものです。図書館職員から、資料を効率的に探し入手するあらすじを具体例をあげながらお話しさせていただきました。

５日間とも大変たくさんの方が参加されて熱心に受講していただきました。

（参考調査掛）

電子図書館的機能の具体化のために「電子図書館専門委員会」設置

平成９年度の電子図書館システムの予算化に伴い、本学としてどのような内容で新しいシステムを構築するかについて専門的見地から助言していただくために、６月16日付けで標記「電子図書館専門委員会」が商議会のもとに設置されました。専門委員は、各学部・研究所の商議員16名、宇治地区及び本部地区の研究所から各１名、大型計算機センター及び総合情報メディアセンターから助言者各１名計20名で構成されています。

６月19日に第１回、７月11日に第２回の専門委員会が開かれ、京都大学に必要な機能や情報源、京都大学エンサイクロペディアとして電子化する資料、京都大学電子図書館システムの構成内容等について専門的見地からの議論が開始されています。

現在附属図書館では、第２回専門委員会で決定された「資料電子化に関する部局調査」（アンケート方式）を各部局に依頼し、全学的なコンセンサスを得るための調整材料を作成する作業に取り組んでいるところです。

一方、電子図書館システム及び図書館業務システムの調達のための取り組みも進められてきており、８月８日に行われた開札の結果、運用中の業務システムの契約メーカーである富士通の製品に決まり、導入のための詳細打ち合わせが始まったところです。

９～10月頃に開催される予定の第３回専門委員会において、導入予定システム及び部局アンケート調査を踏まえた具体的な検討をさらに進めてゆく予定です。

（電子情報掛）

《会議において配布された資料》
・大学図書館における電子図書館的機能の充実強化について（1996.7.29学術審議会建議）
・電子図書館プロジェクトの現状と京都大学電子図書館計画（案）について
・京都大学高度電子図書館システム計画書（概要）（1996.6.11）
・京都大学電子図書館システム計画における機能（案）について
・図書館業務用電子計算機システム仕様書（平成９年５月）
・ＥＥＳ Journal List
・共同データベース利用状況（平成８年４月～平成９年３月）（大型計算機センター）
・附属図書館参考業務関連利用状況（平成８年度分）
・部局発行の定期的出版物一覧（京都大学自己点検・評価報告書1994）
・Gutenberg Literature（参考）
・電子ジャーナル購入価格について（参考）

京都大学創立百周年記念展覧会
知的生産の伝統と未来

京都大学の一世紀間の知的生産を振り返り
学問の未来を展望

京都大学は今年、明治30年の創立から数えて百周年の記念すべき年を迎えました。この百年の間に、京都大学はわが国を代表する高等教育および学術研究の機関として、多くの人材を世に送り出すとともに、数々の独創的な学術研究成果を国の内外に問うてきました。この記念展覧会は、百周年という一つの通過点にあって、京都大学の創立期からの歩みと先人が築いてきた輝かしい知的生産の伝統の一端を振り返り、新たな百年に向けて取り組みつつある学問の最前線の、これまた一端をかいま見ていただくことを主題として企画したものです。

もちろん、京都大学は、この世紀を通じて常に順風の中を歩み続けたわけではありません。幾度かの困難な時期を経験し、そのつど、構成員が懸命に考え、行動してきた歴史をもつことも周知のとおりです。このことにかかわる資料の展示も試みました。

私どもは、京都大学の構成員や卒業生のみならず広く一般市民の方々に、京都大学の一世紀の間における知的生産、新しい課題に取り組む学問の最前線、そして困難な時代、若人の活躍などについて、ゆかりの品々や画像をご覧いただき、伝統と未来に関して考えるよすがにしていただければと願っております。

広く皆様方のご来場をお待ちいたします。

京都大学創立百周年記念展実行委員会委員長
京都大学大学院人間・環境学研究科教授
足利　健亮

記

【会期】10月28日(火)～11月24日(月)
ただし、11月10日(月)、17日(月)は休み。
【時間】午前9時30分～午後4時30分
【主催】創立百周年記念展実行委員会
入場無料。

【総合博物館会場】　〈展示テーマ〉

1．古代への情熱
2．工学事始め
3．名建築
4．哲学者たち
5．東洋学の系譜
6．学問の自由を求めて
7．栄誉
8．登山・探検とフィールド調査
9．人文科学研究所と共同研究
10．未来へ

【附属図書館会場／3階展示室】

創立期の京都大学
若人たち

【サテライト会場／6エリア】

会期は各々の会場により異なります

■総合人間学部／大学院人間・環境学研究科〈科学技術と人間生存の調和〉
■大学院理学研究科〈理学ミニ博物館展示〉
■大学院工学研究科・工学部・大学院エネルギー科学研究科〈知的生産と未来を拓くテクノロジー〉
■基礎物理学研究所〈湯川秀樹博士の業績及び理論物理学の系譜と展望〉
■大型計算機センター〈スーパーコンピューティングの可視化、ＡＴＭを使った超高速通信、コンピュータ見学ツアー〉
■宇治キャンパス　◆化学研究所◆エネルギー理工学研究所◆木質科学研究所◆防災研究所◆超高層電波研究センター
〈特別公開〉■埋蔵文化財研究センター
〈京都大学構内の遺跡から出土した資料〉

※サテライト会場の詳細は展覧会のチラシをご覧いただくか下記までお問い合わせ下さい。
総合博物館事務掛（tel.753-3274）
附属図書館庶務掛（tel.753-2613）

附属図書館利用統計から（平成８年度）

平成８年度の附属図書館の利用実態を示す表やグラフ等のデータを以下に掲載します。

図書館活動の評価に役立つ基本的な数字を利用者・資料・サービス毎に拾い集めてみました。

実際的には、これらのデータを基にして組織的に評価し、フィードバックすることが必要だと思われますが、平成10年度以降にそのような評価を計画していただくことにして、今回はデータのみを掲載することにしました。（編集部）

○サービス対象者数

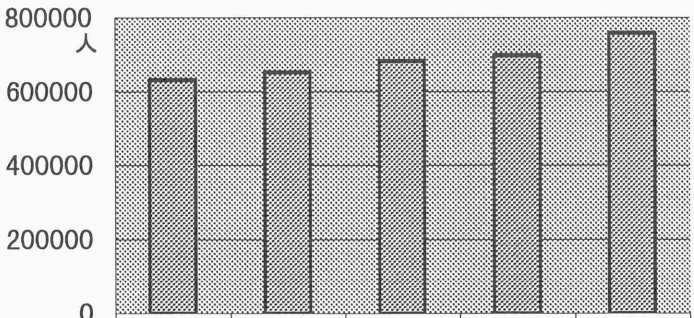
	学部生	院生	教職員	研究生等	その他
サービス対象者数	14,362	6,905	5,304	690	…
登　録　者　数	13,415	6,490	4,333	390	2546
登　録　率	93%	94%	82%	57%	…

＊ その他：卒業生、生協職員、スタンフォード日本センター学生、放送大学生等を含む。

○開館日数と一日当たり入館者数

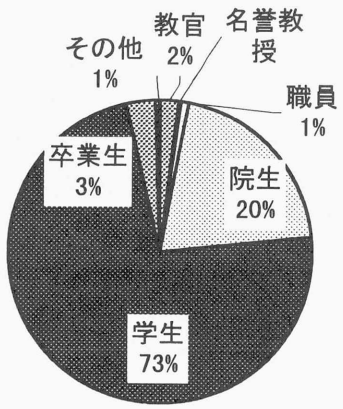
	平日	土曜日	日曜日	
開　館　日　数	220	40	40	合計　300日
一日当たり入館者数	3,083	1,161	659	平均 2,504人

○入館者数５年間推移

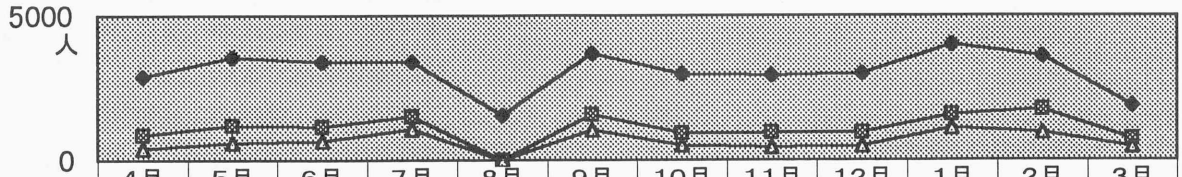


	平4	平5	平6	平7	平8
学外	2408	3165	3253	3829	4475
学内	629815	650724	680701	695896	754792
合計	632223	653889	683954	699725	759267

○身分別入館者数

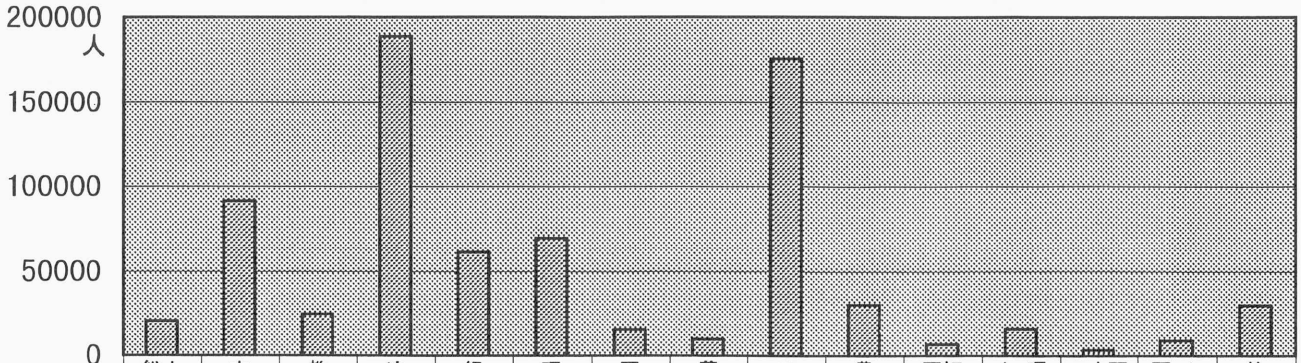


○一日当たり入館者数月別推移



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平日	2892	3563	3391	3389.3	1550	3699.2	2987	2933	3000.7	3992.3	3602	1878
土曜日	861	1201	1148	1519	0	1584	935	959	962	1571	1749	739
日曜日	405	609	660	1067	0	1051	503	437	486	1107	945	471

○部局別入館者数



	総人	文	教	法	経	理	医	薬	工	農	医短	人・環	エネ研	研・セ	他
年計	20388	91198	24426	188498	61245	69476	15452	9696	175618	30087	6789	15997	3258	9167	29762

○図書(製本雑誌を含む)

		和	洋	合計
蔵書冊数	開架	80,487	7,323	87,810
	書庫	435,388	252,458	687,846
	合計	515,875	259,781	775,656
年間増加冊数		7,119	2,278	9,397

○雑誌(外国雑誌センター、工学部共通及び化学系雑誌等を含む)

	和	洋	合計
所蔵タイトル数	11,327	8,095	19,422
年間受入雑誌種類数	2,907	1,523	4,430
新聞受入種類数	8	14	22

○CD-ROMデータベース

スタンドアロン型　　(端末　7台)

種類：

CD-HIASK
(朝日新聞記事データベース)
CD-ASAX
(朝日新聞・戦後50年記事見出しデータベース)
学術雑誌総合目録
判例MASTER
J-BISC(事務用)
国文学研究資料館マイクロ資料目録
国立国会図書館雑誌記事索引
CD-毎日新聞
平凡社世界大百科事典
季刊　書誌ナビ
その他(白書、寄贈の個別目録)

Bibliothèque nationale française (フランスの書誌情報)
Biography & Genealogy Master Index(人物情報)
Global Books in Print Plus(英語の図書・刊行物情報)
Boston Spa Conferences(イギリスの会議録情報)
Boston Spa Serials(イギリスの定期刊行物情報)
Boston Spa Books(イギリスの書誌情報)
Deutsche Nationalbibliographie(ドイツの図書・刊行物情報)
Dissertation Abstracts Ondisc(欧米の博士論文情報)
Encyclopedia Americana(百科事典：アメリカーナ)
eHRAF(世界の民族に関する一次文献データベース)
NTIS Order NOW Catalog(米国政府レポート情報)
Oxford English Dictionary, 2nd ed.(英語辞書)
SCI Journal Citation Reports(科学系雑誌引用情報)
Ulrich's Plus(刊行物情報)

ネットワーク対応型　　(館内端末　12台)

種類：	(ユーザー)
MEDLINE(医学文献データベース)	10
GeoRef(地質学・地球物理学文献データベース)	4
PsycLit(心理学・行動科学文献データベース)	4
Biological Abstracts on CD (生物学・ライフサイエンス文献データベース)	10(農学部サーバより)

○画像データベース

貴重資料『今昔物語集』(鈴鹿家旧蔵)、『兵範記』(古写本)＜平松文庫＞、『國女歌舞伎繪詞』[奈良絵本]等、24点。

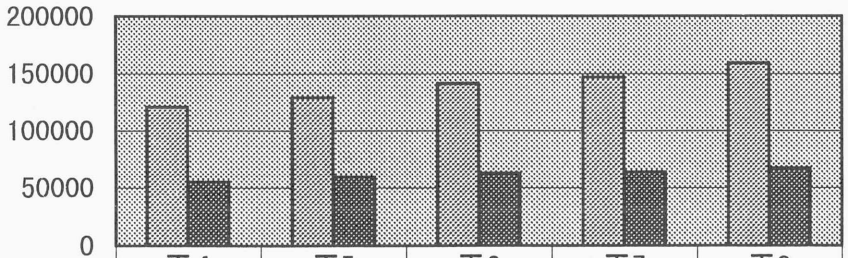
○資料利用状況

資料別利用状況(学内者・学外者)

	利用冊数			利用人数		
	学内	学外	合計	学内	学外	合計
普通図書	106,924	6,159	113,083	54,787	1,418	56,205
雑誌	13,000	3,396	16,396	5,755	971	6,726
新聞	20,803	966	21,769	1,880	115	1,995
貴重書	719	3,368	4,087	126	289	415
マイクロ	439	196	635	150	29	179
参考図書	2,973	222	3,195	1,687	116	1,803
小　計	144,858	14,307	159,165	64,385	2,938	67,323
AV資料	846		846	761		761
HRAF				7	2	9
合計	145,704	14,307	160,011	65,153	2,940	68,093

＊HRAF(Human Relations Area Files)：世界の諸民族・諸地域の社会を対象に、実証的な研究業績を体系的に整理した一次資料。
＊学外者には、国立私立大学学生・教員、研究機関研究者、一般市民、放送大学生などが含まれる。
＊学外者の利用はすべて閲覧に限られる。(放送大学生は例外)
＊学内者と学外者の利用冊数比は9：1である。

総利用冊数・人数の5年間推移



	平4	平5	平6	平7	平8
利用冊数	120814	128971	141311	146914	159165
利用人数	55027	59338	62695	63940	67323

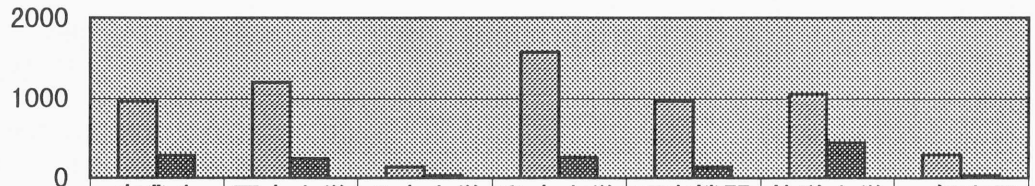
(うち学外者)

利用冊数	13836	10860	14303	14859	14307
利用人数	2061	2102	2227	2569	2938

＊総利用…資料の閲覧及び貸出数。
昭和59年度より開架制をとっている。

＊平成8年度から、貸出・返却カウンターの時間延長。(20:00まで)
＊AV資料、HRAFは含まない。

○学外者の利用



	卒業生	国立大学	公立大学	私立大学	研究機関	放送大学	一般市民
▨ 利用冊数	955	1196	136	1573	966	1050	283
▩ 利用人数	281	242	35	251	139	438	32

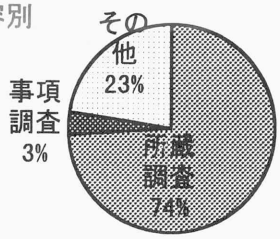
合 計
6159冊
1418人

○参考調査

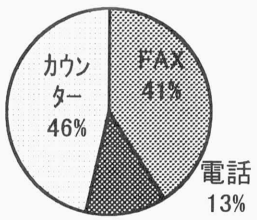
文献調査件数

	国 内	国 外	合計
受付(他大学から・電話 FAX・ｶｳﾝﾀｰ)	11,769 (うち学外者 5,715)	37	11,806
依頼(他大学へ)	190		190
合計	11,959	37	11,996

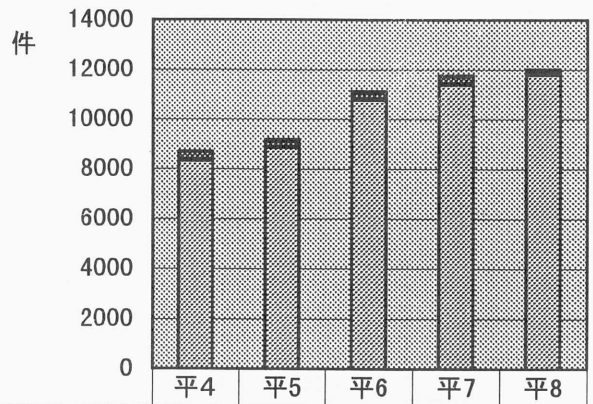
内容別



形式別

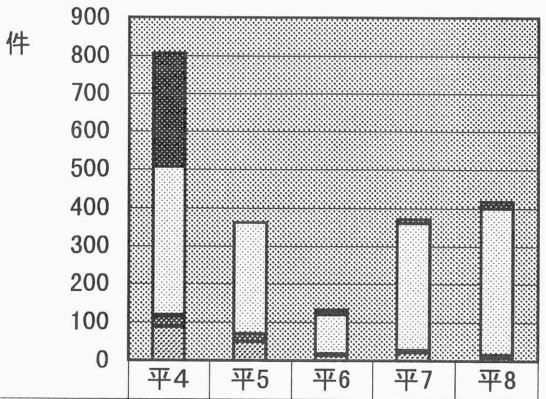


文献調査件数5年間推移



	平4	平5	平6	平7	平8
□ 国外受付	35	42	37	38	37
▩ 国内依頼	353	277	314	336	190
▨ 国内受付	8300	8845	10753	11373	11769

代行検索件数5年間推移



	平4	平5	平6	平7	平8
▩ 大計ｾﾝﾀｰ	302		13	12	19
▨ NACSIS-IR	388	291	103	332	383
□ STN	3	0	0	2	1
▩ JOIS	27	20	3	2	6
▨ DIALOG	87	48	13	22	8

○相互利用

他大学図書館訪問利用件数

	共通閲覧証	資料利用願	特別利用願	合計
他大学から	1,457	1,817	82	3,356
他大学へ	451	599	200	1,250
合計	1,908	2,416	282	4,606

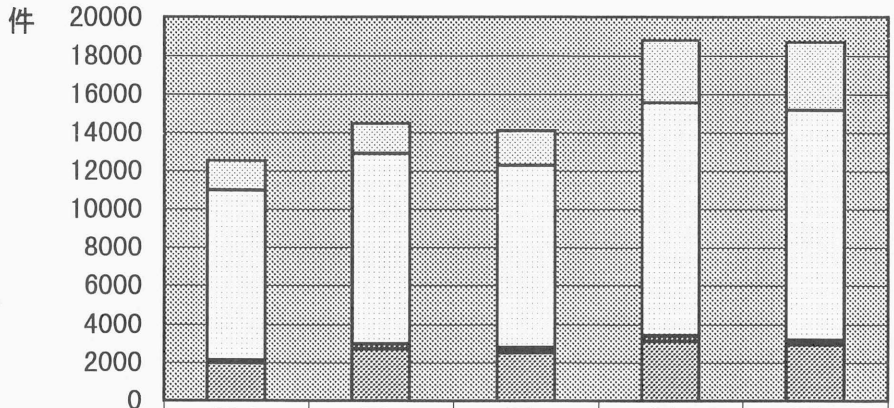
＊共通閲覧証　：　国立大学間共通閲覧証

＊特別利用願　：　国立大学附属図書館間夏季休暇中の特別利用願

文献複写件数

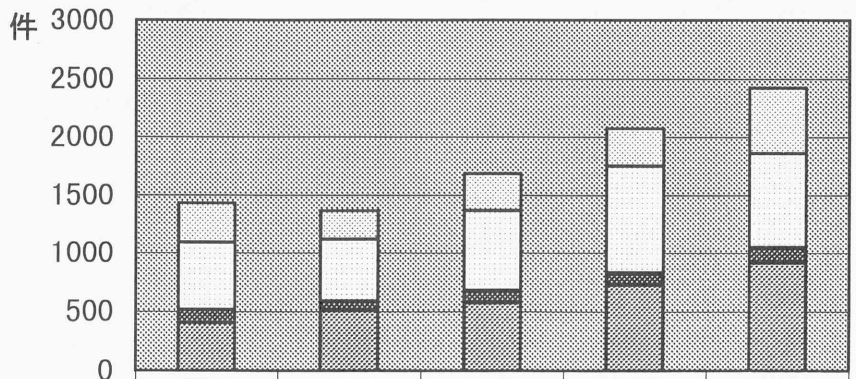
	国内	国外	学内	合計
依頼(他大学へ)	3,168	229	1,529	4,926
受付(他大学から)	15,522		2,954	18,476
合計	18,690	229	4,483	23,402

文献複写件数(国内)5年間推移



	平4	平5	平6	平7	平8
受付－謝絶	1582	1591	1842	3235	3533
受付－受付	8863	9913	9514	12158	11989
依頼－謝絶	147	267	247	294	259
依頼－受付	1944	2694	2498	3101	2909
合計	12536	14465	14101	18788	18690

現物貸借件数5年間推移



	平4	平5	平6	平7	平8
貸出－謝絶	335	244	323	323	566
貸出－貸出	578	535	684	919	811
借用－謝絶	109	75	104	106	131
借用－借用	404	507	572	722	913
合計	1426	1361	1683	2070	2421

(資料運用掛)

全国共同利用図書資料（大型コレクション）の利用案内について

このたび下記大学図書館より、平成7年度全国共同利用資料（大型コレクション）について利用案内がありましたので、お知らせいたします。

－記－

宮城教育大学附属図書館
「Pestalozzi's Samtliche Werke
（ペスタロッチ著作・研究書）」
＊内容明細あり

岐阜大学附属図書館
「Landolt-Börnstein : Numerical Data and Functional Relationships in Science and Technology, New Series. Group I. Elementary Particles, Nuclei and Atoms（ランドルト・ベルンシュタイン数値表、第1群：原子核・素粒子物理学）13-14巻）」
＊内容明細あり

九州芸術工科大学附属図書館
「19th Century American Architectural Books : A Basic University Research Collection.
（19世紀アメリカ建築研究文献コレクション）」　＊内容明細あり

（参考調査掛）

教官寄贈図書一覧（平成9年4～7月）

生田美智子（総人　非常勤講師）
・大黒屋光太夫の接吻 1997

石原　潤（文　教授）
・改革開放下の河南省新鄭市の変容 1997

稲垣耕作（工　助教授）
・コンピュータ概説 1997

大山喬平（名誉教授）
・日本社会の史的構造古代・中世 1997

小川　侃（人環　教授）
・現象学と構造主義 1990
・現象学と文化人類学 1991
・クラウスヘルト現象学の最前線 1994
・世界・地平・雰囲気-構造存在論と新しい現象学の視点からの研究 1997
・Time and Nothingness 1997

上林彌彦（工　教授）
・情報科学の基礎理論 1997

河田恵昭（防研　教授）
・都市大災害-阪神・淡路大震災にまなぶ 1995
・地域防災計画の実務 1997

蔵　琢也（理　研修員）
・美しさをめぐる進化論 1993

小出裕章（原子炉　助手）
・人形峠ウラン公害ドキュメント 1995
・環境と人間-公害に学ぶ 1995
・放射能汚染の現実を超えて 1992

小林圭二（原子炉　助手）
・高速増殖炉もんじゅ-巨大核技術の夢と現実 1994
・高速増殖炉もんじゅ事故 1996

・チェルノブイリ旅日記 1992
・原発事故-その時、あなたは！ 1995

田中　喬（人環　教授）
・小建築論または生活環境構成論への試み 1997

長尾　眞（工　教授）
・NHK人間大学 マルチメディア21世紀の見取り図 1997
・日本語音声　1，2 1997
・奈良国立文化財研究所史料　第42冊 本篇,解説 1996
・ブレークスルーのために 1997
・知能情報メディア情報処理のためのカテゴリ帰属知識を用いたパターン　認識問題の数理的一般解決 1997
・日本語と外国語との対照研究4～5 1997
・言葉に関する問答集（新ことばシリーズ6） 1997
・辞書（新ことばシリーズ5） 1997
・テレビ放送の語彙調査 1997
・鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展 1997

中島　剛（工　助教授）
・フッ素化学入門-基礎と実験法- 1997

夫馬　進（文　教授）
・中国善会善堂史研究 1997

三木晴男（名誉教授）
・小西行長と沈惟敬 1997

業　務　日　誌（平成９年３月～８月）

３月
４日　附属図書館商議会（平成8年度第4回）
　　選書分担商議員会議
　　NACSIS-ELS説明会（大阪大学）
６日　NACSIS総合目録小委員会
７日　NACSIS総合目録委員会
12日　附属図書館商議会（第５回）
　　意見招請のための説明会（出席メーカー：ビジュアルテクノロジー、リコー、日本サンマイクロ、JIP、NTT、富士通、日商エレクトロニクス、日商岩井、ヒューコム）
13日　NACSIS中国語資料データベース化検討ＷＧ
18日　近畿北部地区機械化連絡会議
19日　意見招請締め切り（JIP、京セラ、日商岩井、NTT、富士通）
21日　部局図書系掛長との事務連絡会議
26日　仕様策定委員会（最終回）

４月
10日　法学部オリエンテーション
16日　整理系・閲覧系掛長等事務連絡会議
17日　仕様書について文部省への説明
21日　研究開発室会議（平成9年度第1回）
　　新入生オリエンテーション（～23日）
24日　近畿地区国立大学図書館協議会
　　近畿地区国公立大学図書館協議会企画委員会

５月
12日　会計検査院実地検査（～16日）
14日　利用者オリエンテーション（～16日）
16日　政府調達に係る入札公告
20日　ＢＢＣＣ電子図書館プロジェクト見学会
21日　部局図書系掛長との事務連絡会議
　　次期システム運用ＷＧ全体会議（第1回）：運用業務単位グループ会議
23日　附属図書館商議会（平成9年度第1回）
26日　仕様書配布開始
27日　国立大学図書館事務部課長会議（東京医科歯科大学）
28日　国立大学図書館協議会賞選考委員会、常務理事会（東京大学）
29日　国立大学図書館協議会理事会

（東京大学）
30日　国立大学図書館協議会と学術情報センターとの業務連絡会

6月
6日　入札説明会（日本サンマイクロ、JIP、日本オラクル、日商岩井、日商エレクトロニクス、伊藤伊、富士通、ドットウェル）
12日　NACSIS-ILL地域講習会（～13日）
13日　近畿地区国公立大学図書館協議会総会（大阪女子大学）
外国雑誌センター館会議（一橋大学）
17日　整理系・閲覧系掛長等事務連絡会議
CA on CD打合せ
19日　電子図書館専門委員会（第1回）
25日　国立大学図書館協議会総会（～26日）（都メッセ）

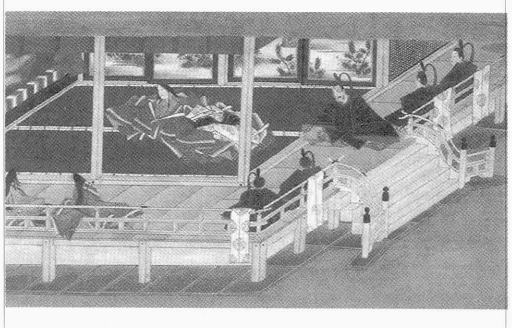
7月
1日　技術審査に係る担当教官（技術審査職員）への説明
7日　入札締め切り
8日　技術審査作業開始
9日　NACSIS-CAT地域講習会①（～11日）
11日　電子図書館専門委員会（第2回）
技術審査委員会（第1回）
14日　NACSIS-CAT地域講習会②（～16日）
17日　技術審査：メーカーヒヤリング
18日　部局図書系掛長との事務連絡会議
22日　技術審査委員会（第2回）
23日　次期システム目録担当者連絡会

8月
6日　NACSIS-CAT（雑誌）地域講習会（～8日）
8日　業務用電子計算機システム開札（メーカー決定：富士通）
21日　導入システム全体説明会

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　目　次　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ディジタル図書館（万波通彦）　1
京都大学附属図書館百年の沿革　3
新入生オリエンテーションを開催　8
中級オリエンテーションを開催　9
「電子図書館専門委員会」を設置　10
京都大学創立百周年記念展覧会の開催　11
附属図書館利用統計から（平成8年度）　12
全国共同利用資料の利用案内について　17
教官寄贈図書一覧（平成9年4～7月）　17
業務日誌（平成9年3～8月）　18
蔵書統計（平成9年3月31日現在）　20

京都大学附属図書館所蔵貴重書『玉ものまへ』から



京都大学附属図書館館報「静脩」
Vol.34　No.1（通巻125号）
発　行　1997年10月16日
編　集　静脩編集委員会
（責任者：附属図書館事務部長）
刊行者　京都大学附属図書館
〒606-01　京都市左京区吉田本町
Tel.075-753-2613

蔵書統計（平成９年３月31日現在）

	受入冊数		蔵書冊数		入力件数	
	和書	洋書	和書	洋書	和書	洋書
附属図書館	7,119	2,278	515,875	259,781	139,000	39,960
総合人間学部	3,336	5,438	303,416	263,844	29,574	56,490
文学部	8,899	9,858	467,388	312,228	9,235	40,677
教育学部	1,707	1,324	70,432	54,469	21,911	15,236
法学部	3,385	5,756	235,796	319,877	23,142	31,987
経済学部	3,597	3,308	212,289	206,255	14,094	19,297
理学部	631	1,488	45,287	197,960	9,135	18,499
医学部	1,374	2,144	47,315	131,104	3,353	3,603
薬学部	278	942	11,340	29,719	2,343	1,547
工学部	2,241	4,040	136,713	253,542	17,369	29,367
農学部	1,851	1,310	164,477	140,503	12,072	6,385
農学部演習林	140	89	9,972	3,026	1,877	591
化学研究所（宇治五研）	70	1,116	28,722	87,779	1,739	10,923
人文科学研究所	3,696	2,071	419,898	67,909	11,288	12,421
胸部疾患研究所	0	214	1,611	5,175	43	159
基礎物理学研究所	130	1,438	7,956	70,053	722	13,195
ウイルス研究所	0	80	484	9,824	113	952
経済研究所	548	514	39,172	32,140	1,815	8,363
数理解析研究所	33	697	6,223	66,801	3,605	24,126
原子炉実験所	9	775	13,751	30,788	685	1,443
霊長類研究所	184	380	5,599	11,936	2,209	1,408
東南アジア研究センター	1,260	3,262	18,761	63,501	6,775	15,310
大型計算機センター	155	345	5,230	10,606	2,201	3,971
高等教育システム開発センター	205	136	461	207	—	—
その他研究所・センター等	149	363	5,731	10,301	2,862	8,645
医療技術短期大学部	384	51	23,027	5,383	2,604	1,290
人間環境研究科	1,036	1,269	7,775	18,200	2,851	7,056
エネルギー科学研究科	153	79	1,226	1,163	—	—
合　　計	42,570	50,765	2,805,927	2,664,074	322,617	372,901
和洋合計	93,335		5,470,074		695,518	

注）１．医学部には病院を含む　　２．農学部には農場を含む
３．人間環境研究科にはアフリカ地域資料センターを含む　４．蔵書冊数には製本雑誌を含む

編集後記：電子図書館システムを含む新システムのメーカーが決まり、導入稼働に向けた打ち合わせが始まり、慌ただしさが増しています。資料電子化の部局調査が実施され、平成10年１月に向けて着実に歩みだしています。記念すべき今年度第１号として、万波先生から巻頭言をいただき、附属図書館の百年の沿革、大学展等の記事を集め、編集を終えました。京都大学エンサイクロペディアの結実を祈念しつつ。（Z）